● シリーズ　私の見た日本　Vol.226

夢と現実の狭間にある建築：現実からの避難所

Sarah Wagner（サラ ワグナー）

日本の市立長野高校に留学し、ドイツに戻った後、ミュンヘン工科大学に入学。2023年から1年間、東北大学に留学

初めて日本に来たのは2019年だった。そのころ、将来建築士になりたいとはまだ思っていなかった。日本に来たきっかけは一般的な理由で、多くの外国人と同じようにアニメが好きだったからだ。海外でアニメを好きになる人には少し変わった人が多い。アニメの世界は現実世界から離れている作品が多いため、特に海外に住む人々には共感できる部分が少ない。現実以外の何かを探し、冒険心が強く、好奇心旺盛な人にアニメは向いていると思う。新しいことを経験したくて、高校に通いながらアルバイトで留学のためのお金を集めた。

日本に来てみて気付いたことは、日本が現実逃避を求める人々にとって理想的な国であり、その「現実逃避」の感覚が建築にも反映されていることだった。

最近は夏休みを利用して、仙台の商店街をよく歩いている。アーケード下の広い道は交通規制があり歩きやすい。多くの建物がコンクリート造であることはわかるが、商店街を歩くだけでは建物の大きさやファサードを把握するのは難しい。アーケードの影響で2階以上は視界に入らず、店舗の看板がファサードの大部分を隠しているため、建物自体の存在感が薄れている。まるで現実の一部が切り取られて、別の世界、商業界に連れて行かれるかのような感覚を覚える。ファサードが見えても、それは店のラベルとなってしまっている。例えば宝石店のファサードは、有機的な形状と装飾で、周囲の角ばった建物とは一線を画している。そのピンクの外観は、まるでファンタジーの城のようで、初めて見たとき、日本の建築よりもスペインの建築家ガウディの作品を思い起こした。まるで別の世界から来たかのように見えるこの建物は、日本の街並みにおいて異質な存在であり、その非現実的なデザインが周囲から目立っている。

私の祖国ドイツでは、建物が街の景観を壊すと考えられ、こうしたデザインはあまり見かけない。営業している店よりも建物の外観が地域のアイデンティティを決定する。ファサードのデザインやポスターの設置には厳しい規則がある。また、ドイツでは建物が永続的に使用されることを前提に建てられている。20年後に別の店がその建物を使うかもしれないため、ほとんどの建築家が周辺に合わせて普遍的なデザインで建築する。もちろん、ドイツでも店舗は独自の内装や広告で目立とうとするが、建物全体に大きな影響を与えることは少ない。そのためヨーロッパの街並みは均一に見える。日本の街並みは時に一見雑多な印象を与えるが、それが「現実逃避」の場としての魅力を強調しているように感じる。

続いて触れたいのが寿司店である。訪れる人を異次元に誘うデザインの例として日本の伝統的な建物を挙げるのは、日本人にとって少し奇異に聞こえるかもしれないが、私が表現したかったのは、日本から逃げることではなく、その場にある現代の日常からの脱却である。仙台の商店街は時代に取り残された場所ではなく、第二次世界大戦の空襲でほとんどの建物が破壊された後、昭和に形成され、リノベーションを経て現代的な場所となった。そのため、寿司店の建物も、元々の伝統的な建物を再建したものではなく、伝統的なスタイルで新たに建てられたものであり、文脈から外れて配置され、訪れる人を装飾された伝統的な空間に誘うことを意図した店舗だと思う。その建物を見たとき、「千と千尋の神隠し」を思い浮かべた。商店街の繊細な植栽の中で、店舗の境界線から後退して豊かに植えられた植栽と入口が目立っている。その姿は、まるで「千と千尋の神隠し」に出てくる油屋のようだ。植栽の緑のなかにひっそりと佇むこの建物は、現実を忘れてしまうような感覚を呼び起こす。その一方で、商店街にあるカラオケの隣に位置していることが、より一層その異質さを際立たせている。

サンモール商店街を歩いていると、連続して並んでいる建物が見えることもあるが、ほとんどの建物の間には隙間がある。移動を伴う景観の体験において、我々は前方のみから視覚情報を得ているわけではない。眼球や首、時には体全体を振り向けながら、多方向のシーンを認識する。日本の市街地を歩くと、視覚的な情報があらゆる方向から入ってくるため、少し疲れることがあるが、それと同時に刺激的でもある。私は日本でよく隙間からのぞき見ることがある。特に、入口が両側の壁に囲まれ、間口に比べて奥行きがあり、人間が入り込める程度の幅の隙間があると、自然と目がその方向に向く。たまに隙間をのぞくと、異世界が広がっているかのような、商店街とは全く異なる風景が見えることがある。例えば、隠れている店舗（例：アジアンリゾート）や壱弐参横丁の風景。仙台に長く滞在するほど、壱弐参横丁の風景が好きになった。壱弐参横丁の風景は、昔から残された昭和の香りを色濃く残しており、まるでタイムスリップしたような気分にさせてくれる。特に、昭和の遺物を収集して店内に展示している店に行くと、そう感じる。このように、異なる建物が一つの場所に共存すること自体が、日本の建築における一つの「現実逃避」のパターンと言えるだろう。

ヨーロッパにも同じような場所はあるが、現代的な都市景観から旧市街への移行はそれほど急ではない。旧市街の周りの建物も少し古めで、歩くと徐々に旧市街に近づいていると感じることが多い。日本の建物、道、そして区画は互いに強いコントラストを持っているように感じる。そのため、建築設計の課題で地域を分析する際、パターンや共通のデザイン原則を見つけるのが難しく感じることがあった。しかし、多くの異なる建物が一つの場所に存在すること自体が、ある意味パターンと言えるかもしれない。

多様な建築が存在することは、日本人の好奇心が強い証拠でもある。異なる空間を作り出すためには、その空間に似た要素を集め、研究する必要がある。ヨーロッパから影響を受けた建築物も日本で見られるが、それらが日本的な要素と融合し、新しいスタイルを生み出している。多様なことに興味を持ち、新しいことをたくさん試すことは大切だと思う。日本人はお互いに合わせることが得意だが、建築物に関しては周囲に合わせないことが多いのは不思議に思う。それは日本人が自分のプライバシーを大切にしているからかもしれない。日本人の住宅を訪れて、驚くような建築を見たことがある。たとえば、高校の先生の実家は理想的なヨーロッパ風のデザインが施されていて、ホームステイ先の家もとてもユニークだった。ほとんどの家具が手作りで、自然素材で作られた外壁には木の幹が使われていた。そのため、日本では、建物が建築主自身のものであり、彼らの興味や関心が強く表現されていることが多いように感じる。

現実逃避をテーマとした建築は、その日本の特徴的な文化的側面を露出しているだけでなく、外界から隔絶された島国という日本の地理的状況にも起因しているのかもしれない。日本から出たことがない人も多いが、それでも海外に興味を持つ人は多い。忙しくて旅行に行けない人が、海外の風景を幻想し、それを基に新しいデザインを生み出そうとすることもある。基準や伝統は重要だが、異なる空間を取り入れることは、西洋諸国にも学べる点があるだろう。

気候変動に直面する中で、炭素排出を削減する必要があり、現実逃避をテーマにした建築を国内に取り入れることで、新しい場所を発見するために自国を離れる欲求を和らげることができるかもしれない。それが、航空旅行の減少につながる可能性もある。

左上／サンモール商店街　右上／宝石店　左下／ドイツ ミュンヘンの街並み　中下／寿司店　右下／いろは横丁

左／いろは横丁入口　中／いろは横丁の昭和のおもちゃ　右／ホームステイ先の日本の住宅